



# 自然史博物館の研 活 活 動



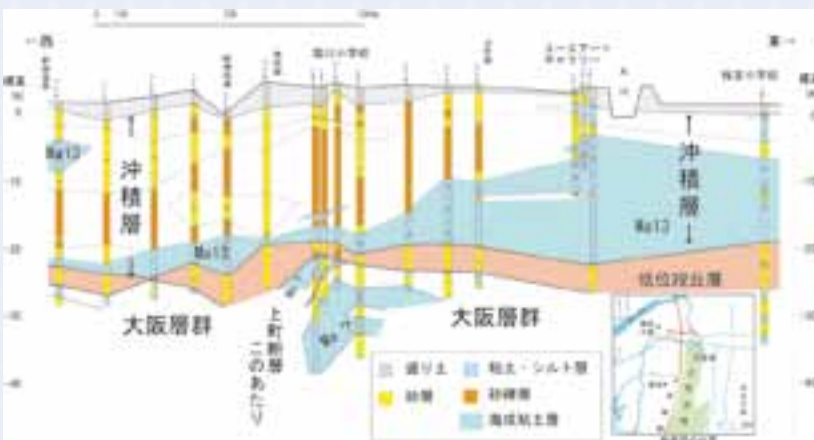
博物館における調査研究は、博物館活動の根幹をなすものである。展示や資料収集、普及教育活動も調査研究との双輪をなしてこそ、その意義や成果が高まる。

自然史博物館では開館当初から学芸員の調査研究の推奨し、その活動に反映している。また、科研費申請機関としての指定や国内外の研究者・機関との共

同研究、外来研究員制度など、制度面からも研究活動を支援できるようにしている。個々の学芸員の研究成果や科研費などの競争的資金の状況については、11ページ以降の「調査研究事業」に譲るが、ここでは近年の科研費など競争的資金において行われた研究について、そのいくつかを紹介する。



▲ 干潟は高度経済成長期にその多くが失われた。開発が進む以前の干潟環境を知る一つの手がかりは博物館の標本である。干潟性生物の標本を国内外の博物館で探索し、生物相の変遷の再構築を試みた。大阪湾や東京湾などの都市圏海域は現存標本が多く、環境の変化をたどることができた。写真は堺産ハイガイ(1900年代前半か・国立科学博物館蔵)と横浜産コオキナガイ(1889-92年・フィールド博物館蔵)。両種とも同海域での近年の記録はなく、貴重な標本記録である。科研費若手研究(B)「博物館標本から再構築する日本の干潟生物相の変遷とその保全への活用」(研究代表者:石田 惣;課題番号:23701025)より。



▲ 博物館に収蔵されているボーリング標本を調査して地質断面図の作成を行い、大阪平野地下の地質層序や構造の研究を行った。左図はボーリング標本調査を元に作成した大阪市北区～都島区の地質断面図である。このような地質断面図を大型プリンターで印刷し、ボーリング標本と組み合わせて小中学校向け貸し出し標本として活用し(右図)、小中学校理科の授業を支援した。公益財団法人日本科学協会平成25年度笹川科学研究助成実践部門(奨励賞受賞)「博物館所蔵のボーリングコアをつかって大阪平野地下の地層をさぐる—地学分野の学校向け貸し出し教材の開発・運用と防災教育への展開—」(研究代表者:石井陽子、研究番号:25-821)より。